

生涯學習情報誌

Life Learning

11 2018
Nov.
NO.339



2018(平成30)年度

12/14
締切

博士号

取得支援事業

生涯学習開発財団は、「人間は感動する心を失わず、何ごとかを学び続ける限り、年齢にとらわれない生き方をすることができる」という理念のもと1983年に設立されました。

平均寿命が延びる今、定年後も学習を継続し、社会へ貢献し続ける中高年の存在は、日本社会にとって大きな支えとなります。

財団では、現在博士号の取得を目指す50歳以上の方々を対象に、2011年度から支援事業を行っております。この取り組みを通して、来るべき高齢化社会の生涯学習を促進し、よりよい社会作りにも貢献することをめざしています。

本事業は、国籍や性別を問わず、また、研究領域は文系・理系を問いません。独創的で社会的な意義のある研究を行い、博士論文を執筆中あるいは提出が予定されているすべての方に門戸は開かれています。皆様からの積極的なご応募をお待ちしております。

■ 採用予定人数

特に人数は定めません。

■ 助成金の支給

- ・支給金額は一人あたり年間50万円
- ・支給期間は1年
- ・支給日は2019年3月

■ 応募資格

以下の条件を満たす者

- ・50歳以上（性別、国籍、所属を問わない）
- ・日本国内に在住している者
- ・博士課程（博士後期課程を含む）に在籍するか、論文博士号の取得をめざし、かつ実行性の高い研究計画書を作成した者、もしくは博士論文の一部をすでに作成した者

- ・日本国内の大学で博士号を取得予定の者
- ・当財団のホームページ及び情報誌にて、氏名・年齢・研究タイトル・写真の公開を了承する者

■ 応募方法

(1) 提出書類

- ・指定申請書
- ・身元証明書
- ・研究計画書
- ・推薦書 ほか

詳細は募集要項でご確認ください

(2) 応募締切日

2018年12月14日(金) 必着

■ 選考

提出書類および面接により選考

お問合せと募集要項の請求は下記まで



一般財団法人 生涯学習開発財団 博士号取得支援事業部
〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-20 虎ノ門実業会館9階 TEL 03-3508-4551
募集要項・申請書は <http://www.gllc.or.jp> E-mail hakushi@gllc.or.jp

2018年10月7日 青山学院大学 青山キャンパス

「人生100年時代」働く大人の学び方

18回目となった今回、最多の約250名が参加して行われた。冒頭、生涯学習開発財団理事長代理として事務局長の佐藤梨奈が登場し、生涯学習の大切さを訴えると同時に、皆さまとともに学んでいきたいとい

いさつした。今回は青山学院大学社会情報学部の、ワークシヨップデザイナー（WSD）育成プログラム2000人突破!!記念を兼ね、講演前に2000人目のプログラム修了者に賞状と花束が贈呈された。

■社会人が学ぶことの役割

立教大学で人材開発や組織開発について研究をしている中原氏。氏の著書、『働く大人のための「学び」の教科書』は、大人がいに学ぶかということ、専門用語を使わず一般人がわかるように書いており、これを教材として講演が進められた。

一般的には「学び」と聞くと、学校や資格、暗記などをイメージする。そして、大人になっても「学び」が必要というのは、自分が未熟だと世にさらすイメージを持つ人もいる。一般の人にとっては、意外と勇気がいるものなのだ。とはいえ、現代社会では働く大人が学ぶ意味が大きくなり、将来を決める1つの要因になっている。

現代の働く大人が学ぶことの役割は大きく分けて2つ。1つ目は、環境の変化に

じて自らを変化させること。2つ目は長い仕事人生を完走すること。とはいえ、理屈はわかるけど実際にどうやるのか。受講者の具体的な「学び」を題材にして「学び方のポイント」を考える。

ここで注意したいのは、他人の学びを「コピー」するのではなく、参考にして自分の学び方を考えるということ。「この講演会は講師が話すのをひたすら聞くのではなく、聞いて、考えて、会話して、気づくというプロセスを実現したい」と中原氏。

さっそく5分ほど時間がとられ、受講者たちは近隣の2〜3名で自己紹介がてら、1つ目の問いである「最近学んでいますか、学んでいることは何ですか」について発言しあった。

■80歳まで働くために学ぶ?

最初のセッションは、なぜわたしたちは「学ぶこと」とつきあわなければならないのか。

1つ目の理由は、「仕事人生が長くなるから」。リンダ・グラットンの『LIFE SHIFIT』には、2007年生まれの日本の子の50%が、107歳まで生きると書かれている。そして、人生100年時代には「80歳」まで働くことになる。このような時代にあつては、長期化する仕事人生に



約250名が参加。

↓左から財団事務局長・佐藤梨奈
講師の中原淳教授
コーディネーターの刈宿俊文教授



講師：中原 淳
立教大学経営学部教授

立教大学経営学部ビジネスリーダーシッププログラム(BLP) 主催、立教大学経営学部リーダーシップ研究所 副所長などを兼任。博士(人間科学)。北海道旭川市生まれ。東京大学教育学部卒業、大阪大学大学院 人間科学研究科、メディア教育開発センター(現・放送大学)、米国・マサチューセッツ工科大学客員研究員、東京大学講師・准教授等をへて、2018年より現職。「大人の学びを科学する」をテーマに、企業・組織における人材開発・組織開発について研究している。専門は人的資源開発論・経営学習論。

備えて、学び直すこと(ときに自分を変えていくこと)が必要になる。

2つ目の理由は、「仕事の外部環境が変化するから」。河合隼雄氏の『大人になることのむずかしさ』という本には、「古代社会では、子どもが社会という箱に入ってしまった大人になれば、ずっと大人で居続けられる時代だった。近代社会では社会の箱が階段のようにスライドしていき、そのままでは次世代の子どもにすら逆転されてしまう」とある。この箱についていくために学び直しが必要になる。

学びにお金ではないが、自己啓発が年収に対してもたらす効果をみると、2〜3年後には少しずつ増える傾向にあり、他にも専門性の高い職業につきやすくなるというデータもある。学ぶことから逃れられないのだ。

「どうせ学ぶなら、強制されるより自分で選んだ学びのほうが楽しいと思いませんか」と問いかけた。

■学びの3つの原理

働く大人の学びで大切なのは、仕事の中の学びで、3つの原理がある。まず「背伸びの原理」。人には今の能力でできることと、サポートがあれば少し背伸びをすることができることがある。今の能力でできることを繰り返してもなかなか能力は伸びない。「今日の背伸びは明日の日常。チャレンジしていますか」というのが1つ目の原理だ。ここで実例として、特別支援学校教員の田中雅子さんの背伸び体験談。

「校長から特別支援教育コーディネーターの指名を受けたが、第1期で前例がなく、発達障害の知識もなかった。学ばないと追いつかないという状況で、お金も時間もたくさんかかったが、選ばれた喜びもあり頑張った」

2つ目は、「振り返りの原理」。何が起ったか、何の意味があったか、これからどうするか、という振り返りの機会を持つことが重要だ。そして、反省よりも成功体験の振り返りをしたほうが次の成功につながりやすいとも言える。

3つ目は、人は人からフィードバックを得たときに学ぶことができるという、つながりの原理。成長するためには、他者の鏡が必要だ。しかし、残業時間が多いのでフィードバックする時間が得られないという現実もある。

3つの原理について、それぞれ2〜3分のディスカッションタイムがとられた。

■「本を1トン読む」効能

自分が直接経験することは一番の学びだが、負担は大きく必ずしもこのやり方で学べるとは限らない。そこで重要になるのが、人の経験から学ぶ間接経験だ。本は他者の経験の蓄積。人の肩に乗って遠くを見渡す「肩車効果」を持っている。

それと、自己の開放。私たちは普段、いろんな偏見やしがらみに縛られて生きているが、本は、それらから自分を開放してくれる。自己を開放するためにいろんな本を読んだほうがいい。冒険に出かけるときの

「地図」にもなる。本を読むことは日常のちよつとした習慣だが、蓄積すると格差ができる。文化庁の調査では、1か月に本を1冊も読まない人は47・5%。サラリーマンの平均の通勤時間は116分で、この時間を読書にあてると1年で約425時間分になる。1トンの本を読むのに約18年かかる。22歳で就職して40歳のときには読んでいる人とそうじゃない人では、1トン分の差ができるのだ。

■越境でわかる本当のスキル

次は、「越境する」ことについて。社会的孤立(Social isolation)という言葉には、家庭と仕事以外に第三の場所がない人を指す意味もあり、日本はその比率がOECD諸国で最も高いとされる。

中原氏が関わった越境の事例の1つに、異業種5社の幹部候補たちが美瑛町で地域課題の解決をするというプロジェクトがあった。プロジェクトを通して越境学習をしたわけだ。そこでいろんなできごとが起こった。それぞれの業種の専門用語ばかり使ったり、お互いにマウンティングし始めた。チームでお昼のカレーを作ったときも、役割分担して進めるチーム、ボートとした人が出るチーム、いつまでも打ち合わせしているチームなどさまざま。すべての課題において必ず振り返りを行った。

「私は、自分の芝で発揮するのが仕事で、他の芝で発揮されるのがスキルだと思っていて、本当の自分のスキルや能力は越境しないとわかりません」



受講生の体験談も。

左から2番目、2000人目修了者のデンルバ・エリナさん。



自身の学びの振り返りを語る迎宿教授。



近隣同士でディスカッション。

最後は、「教えてみる」について。自分が学んだことを人に対して語ることができれば、本当に学んだことになる。ピーター・ドラッカーも、「他人の育成を手がけられない限り自分の能力を向上させることはできない」と言っている。

長く教育に携わっている荻宿氏が、自身の学びの履歴を振り返った。

「23歳で小学校の特別支援教室の担任になり、話せない生徒もいる中で、自分が勝手に人を動かすことはできないということ、『人から学ぶ』経験をしました。普通学級で課題のあるクラスでは、『わからないことがわからない』と言えない難しさに気づきました。自分が面白がらなければ、つまらないということも学びました。大学では、曲者の大学生を相手に『場をどう作るか』ということの重要性を学びました。WSDでは、生徒である大人の方々とのやりとりの中に教えることの面白さがあることを学びました」

今年度から立教大学に移った中原氏は、今年が初任だと思ってやっていると。今までは大学院生や社会人相手だったので、教えるというより一緒に考えるということをやってきた。今は18歳の大学生たちに、人事管理を教えなくてはいけない。最初は空回りばかりだったが、少しずつ教える方がわかってきたという。

「今後、何を学び、どう生きたいか」。働く私たちにとって、これからも考えなくてはならない課題である。

祝

2017年9月 九州大学博士号(工学) 取得

寺浦信之さん(取得時64歳)

【論文テーマ】QRコードと互換性を持つ二次元QRコードの大容量化と秘匿化に関する研究

企業でも、博士研究でも、がまんの積み重ねから革新的な新技術を

QRコードは、皆さんご存知の、小さな正方形が並んだ白黒のマーク。スマホで読み込んで利用する機会も多いはずだ。日本以上に活用されている中国では、買物の支払いや大道芸人の投げ銭まで、QRコードをスマホで読んで決済するそう。

寺浦信之さんは、QRコードにカラーを付加すること、また、小さな四角をさらに細分することで、従来の機能を維持しながら、同じスペースで大容量の情報を読み込ませる、一部に秘匿性をもたせるといった、革新的な技術を生み出している。

■畑違いでもゼロから結果につなげる粘り強さ

QRコードを開発し1994年に特許を取得したのは愛知県の優良企業デンソーだ(現在はデンソーウェーブが継承)。寺浦さんは1985年にデンソーの前身である日本電装に入社し、2009年まで在籍している。なるほど、会社員時代に携わった技術をさらに進化させるための研究ですね、と思いきや、そう単純ではなかった。

そもそも寺浦さんは名古屋大学では原子核工学を専攻。石油枯渇の危機が叫ばれた時代で、未来のエネルギーとして核融合に期待をされていた。デンソーでその知識は一部に活かされたが、どちらかといえば畑違いの、音声認識技術やFAコンピュータの開発に関わる。ほとんどゼロからの開発で、自分で実験装置を作るところからだった。FAコンピュータは約1千万円で売り出し1億円のミニコンを駆逐したが、成功したのもつかの間、1台数十万円のパソコンの登場で役割を終えた。

■RFID分野の第一人者として

次に携わったのがRFID技術。現在、交通系カードや自動車のETCカードなどに活用されている、非接触で情報を認識する技術だ。商品管理やレジの無人化など今後も期待がされている。寺浦さんは2000年から9年にわたって日本自動認識システム協会RFID部会長を務めるなど、その分野の第一人者として活躍したのち56歳で独立。2009年に㈱テララコード研究所を設立した。RFIDを活用した、宇宙実験に関係する物品管理や、放射性廃棄物の管理など、人類の将来にとって重要な鍵となるプロジェクトにも関わっている。

「RFIDの導入コンサルティングや共同開発を進める中で、博士号を持つ交渉相手も多く、自分も取得したほうが好都合だと思ふことがしばしばあり



「今の仕事に博士号は欠かせない。初めて会う前に論文と解説記事を送っておくと話がスムーズに進む」という。

ました。そのころ出席したRFIDの日中交流会議の席で、九州大学の櫻井幸一教授から博士号取得を勧められたのがきっかけです。タイミングよく長男が大学院を卒業し、入れ替わりに私が入学しても学費は増えないので、妻もOKしてくれました」

2011年に九州大学大学院博士後期課程に入学するが、研究は順調とはいかなかった。

「自分では当然専門分野のRFIDの論文で博士号を取るつもりだったのですが、ある日突然櫻井教授から、二次元QRコードの研究を拡張したほうがおもしろいよと勧められたんです。デンソーではQRコードは別グループがやっていたので、またゼロからの研究が始まりました」

■博士号を人一倍仕事に活用したい

予定より時間はかかったが、2017年に見事取得。挑戦中の方々に送りたい言葉は「がまん」だという。「社会人ドクターは、仕事もあって思い通り進まないでしょうが、もうダメかというときこそ踏みとどまって成就させてほしい」と励ます。

寺浦さんが研究開発したカラー情報を持つQRコードは、情報量の多さ以外にも、偽造や盗難の防止、安全決済、電子署名、会員区分によるサービスの個別化など、様々なシーンでの活用が検討・模索されている。カラーのQRコードは従来の白黒のものとも互換性があるため、近い将来には皆さんの目に触れる機会が増えると思われる。その時は思い出してほしい。この技術は寺浦さんが「がまん」を重ねて実現した証なのだ。